

《研究ノート》

2020(令和2)年度保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲ
学内実習の取り組みについて

鹿児島国際大学福祉社会学部児童学科保育実習委員会

角野 雅彦・関山 均・西谷 憲明^{*}・福島 豪・上谷 裕子・古村 溝

^{*}児童学科教授 模擬保育健康担当

2020(令和2)年度保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲ 学内実習の取り組みについて

鹿児島国際大学福祉社会学部児童学科保育実習委員会

角野 雅彦・関山 均・西谷 憲明^{*}・福島 豪・上谷 裕子・古村 溝

※児童学科教授 模擬保育健康担当

和文抄録：2020年に入り、新型コロナウイルスが世界中で猛威をふるい、これまでの当たり前だった生活は一変した。その影響で2020年度2月期の保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲは、感染拡大防止の観点から学内で実習を実施した。保育所、施設での実習とは当然あり方が異なったが、この状況を逆手にとり、学内実習ならではの学びを実習生にしてもらえよう、様々な発見、気づきを促す取り組みを事前に構築した。

結果として、学内実習は無事終わることができた。そればかりか、実習生の様々な気づきや発見をもとに、我々教員も保育に対する新たな気づきがあったように思う。いわば実習生と教員の相互作用により、事前に準備をしていたもの以上の実習が実現できたのではないかと思う。

キーワード：保育所実習、施設実習、学内実習、模擬保育

1. はじめに

本学の保育実習は三年次に、保育実習Ⅰが6月期（施設）と9月（保育所）に科目履修者全員が実施し、保育実習Ⅱ（保育所）及び保育実習Ⅲ（施設）は、双方からひとつを選択することで2月期に例年実施されている。しかし、2020年に入り新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、保育実習Ⅰ（74名）については時期ずれ対応や実習先の調整を行うことのできるうじて実施できたが、保育実習Ⅱ（56名）及び保育実習Ⅲ（18名）については感染拡大防止の観点から例年通りでの実習は困難となった。厚生労働省こども家庭局保育課からはこの状況下の実習について、養成施設の運営に係る取扱いとして令和2年6月15日に、①年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。②実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと。といった事務連絡がなされた。そこで本学科では上文の②に則り、保育実習委員会を中心に学科教員の協働を得ることで学内実習を実施することとなった。学内実習の実施に際しては、厚生労働省からの同通達文に示されている「養成施設にあつては、時間割の変更、補講授業、インターネット等を活用した学修、レポート課題の実施等により必要な教育が行われるよう、特段の配慮をお願いしたいこと。」を勘案して日程を組み、内容はおおよそ次のようなプログラム（オンライン課題含む）を実施することとした。保育実習Ⅱについては、保育現場からの外部講師の講話をはじめ、5領域を中心にした保育案を考え作成する。次に学生間で模擬授業を行いフィードバックすることで、保育技術等の学びを深める。最終的に個人による評価保育に臨み保育の疑似体験をすることで、基本的な子どもの発達の理解や保育技術の習

得を図ることとした。また、保育実習Ⅲでは、大きく障がい系と養護系に分類し、外部講師の講話に加えて近隣の施設に協力を仰ぎ見学実習を行うとともに、DVDの視聴や調べ学習等を行うことで施設や障がいについての理解や利用者への対応についてグループ討議を中心に学びを深める。最終的な評価実習(全体発表)にあたっては、各自で設定した課題についてまとめたものを発表することで、現場での実践に備えることとした。

本研究ノートは、2021年2月9日～2月19日の期間に行われた、鹿児島国際大学福祉社会学部児童学科三年次保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲ学内実習の取り組みについての実践記録である。

2. 保育実習Ⅱ（保育所）主担当／角野雅彦

(1) 全体スケジュール

a) 実習期間

今回の学内実習では、実習期間をステージごとに指導のねらいと形態及び内容を設定した（表1参照）。大学を実習施設として利用する点を考慮した結果、まず実習生56名を8クラス（1クラス7名）に分散、次にそれぞれの実習園の代替として実習教室を割り当てた。Ⅰ期は全体講義が主体であったが、Ⅱ・Ⅲ期はそれぞれの教室にて少人数での実習を行った。これはコロナ感染症のリスクを減らすためでもあり、昼食もなるべく手弁当を持参してそれぞれの教室で少人数で食べるよう指導した。

さらに同様の理由から、実習3日目と8日目をオンライン学習日としたことで、土日を入れて2日通学&1日自宅学習（もしくは休日）という負担の少ないカリキュラムを組むことが可能になった。その効果もあってか、厳冬の厳しい時期での実施であったが、10日間に及ぶ学内実習を全員が無事に完遂することができた。

表1. 実習ステージのねらいと形態及び内容

Ⅰ期

期間	実習のねらい	実習の形態	担当者
2月9日～12日	子ども理解、研究的態度、保育技術	視聴覚教材の視聴、講話と討論、実技	上谷、角野、古村、西谷、福島、外部講師

Ⅱ期

期間	実習のねらい	実習の形態	担当者
2月13日～17日	指導案作成、集団及び個別援助の技術	模擬保育	上谷、角野、西谷、福島

Ⅲ期

期間	実習のねらい	実習の形態	担当者
2月18日～20日	保育所の理解、安全面の配慮、評価授業準備	講話と討論、調べ物学習、評価授業	福島、各クラス担任

表2. 保育実習Ⅱ学内実習スケジュール (学内40コマ60時間オンライン実習2日含む+家庭学習30時間)

	火	水	木	金	土
	2月9日(1日目)	2月10日(2日目)	2月11日(3日目)	2月12日(4日目)	2月13日(5日目)
主担当	角野	古村・西谷	終日オンライン実習 福島 課題提出は19時まで	A～Dグループ模擬保育担当者(上谷、角野、西谷、福島)	
9:00～9:10	集合、準備、着替え等(各クラス教室及び更衣室) リーダーは点呼を取り、集合写真撮影、不在者を福島先生にLINE送信				
9:10～12:10	DVD視聴から子どもの見る世界を考える(8331)	『幼児期運動指針』について	伝承遊び	指導案作成(各グループ教室)	
	グループディスカッション(8331)	年齢による子どもの実態と保育案の書き方			
12:10～12:20	リーダーは出勤簿を集めて担任の研究室に提出し押印をもらいメンバーに返却。 15日(月)、メンバーから9～13日までの日誌を集めて担任に提出する。				
12:20～13:00	昼休み(感染症リスク軽減のため、昼食は各クラス教室でとること)		昼休み(感染症リスク軽減のため、昼食は各クラス教室でとること)		
13:00～16:00	保育所の子育て支援(8331)	年齢に応じた教材①(模擬保育の担当決め)	児童文化財	模擬保育(各グループ教室)	
	つるみね保育園長杉本先生の講話(8331)	年齢に応じた教材②	子どもを取り巻く文化について	講評・グループディスカッション(各グループ教室)	
事後学習	帰宅後は事後学習を行う。(その日のまとめと反省、日誌の記入、レポート)*学習内容を記載すること		帰宅後は事後学習を行う。(その日のまとめと反省、日誌の記入、レポート)*学習内容を記載すること		

	月	火	水	木	金
	2月15日(6日目)	2月16日(7日目)	2月17日(8日目)	2月18日(9日目)	2月19日(10日目)
主担当	A～Dグループ 模擬保育担当者		終日オンライン実習 福島課題提出は19時まで	クラス担任	クラス担任
9:00～9:10	集合、準備、着替え等(各クラス教室及び更衣室)				
9:10～12:10	指導案作成(各グループ教室)		サブカルチャー調べもの学習	評価保育準備(各クラス教室)	評価保育準備(各クラス教室)
12:10～12:20	リーダーは出勤簿を集めて担任の研究室に提出し押印をもらいメンバーに返却。 19(土)、メンバーから15～18日までの日誌を集めて担任に提出する。(同日16:10以降、担任より返却) 19日の日誌は、翌20日12:30までに、各自で支援課ボックスに提出する。				
12:20～13:00	昼休み(感染症リスク軽減のため、昼食は各クラス教室でとること)		昼休み(感染症リスク軽減のため、昼食は各クラス教室でとること)		
13:00～16:00	模擬保育(各グループ教室)		保育園設置基準	評価保育準備(各クラス教室)	評価保育準備(各クラス教室)
	講評・グループディスカッション(各グループ教室)		実習における安全面の配慮～評価保育に向けて		評価保育(各クラス教室)
事後学習	帰宅後は事後学習を行う。(その日のまとめと反省、日誌の記入、レポート)*学習内容を記載すること				

○クラス教室

A角野(8329)、B福島(8201)、C上谷(8116)、D古村(8330)

A鮫島(8232)、B帖佐(8231)、C深田(8409)、D脇(8331)、更衣室(グループ学習室)

●グループ使用教室(模擬保育)

福島(8409)、角野(8111)、上谷(8101)、西谷(8201)

b) クラス担任制

通常実習における園長や実習指導者に相当する指導者として、児童学科教員をそれぞれのクラスに配置し、計8クラス構成で8名の学科教員が指導担任となった。(表2参照)

主な担任の業務は以下の通りである。

- ・8クラス構成で指導担任を置く。(角野、福島、上谷、古村、鮫島、帖佐、深田、脇)
- ・学内実習開始前に面談を行う。(1月21～29日の間、メールでも可)
- ・出勤簿に押印する。(12:10～20の間、リーダーが研究室に来室)
- ・随時担当クラスの実習状況を巡回する。(オンライン実習日を除く)
- ・日誌に押印する。簡単なコメントも記述可能、とくに必要のない場合は不要。
- ・最終日に「評価保育」を実施する。
- ・実習終了後は「実習生評価表」を記入する。
- ・クラス教室：角野(8329) 福島(8201) 上谷(8116) 古村(8330) 鮫島(8232) 帖佐(8231) 深田(8409) 脇(8331)

c) 模擬保育と評価保育

実習Ⅰ期では、保育者としての知識習得を目指し、座学が中心ではあるものの、グループ討論などで各クラスの一体感を育てよう努めた。これはその後のⅡ期、模擬保育に備えてのことである。模擬保育では、保育教諭、補助教諭、そして子どもと、役割に応じた発言や振る舞いが求められるが、それには実習生同士の呼吸が合うことが望ましく、そうでないと模擬授業が空々しい活動になることがあるので、意見交換の機会を多く設けた。

実習中盤で教員も実習生も疲れが見えた時期であったが、4日間にわたって2クラス合同で保育内容領域ごとの模擬保育を実施した結果、実習生の保育実践力は大きく高まったものと思われる。(表3参照) 模擬保育の指導には教員の専門性がより求められるため、保育内容領域や保育指導法を担当する教員が中心となって指導に当たった。実際の領域ごとの内容と詳細については後述する。

Ⅲ期では、学内実習のまとめとなる評価授業とそれに向けての準備を、各クラス担任の指導の下に実施した。

表3. 第Ⅱ期模擬保育スケジュール

	2月12日(金) 1～4限目	2月13日(土) 1～4限目	2月15日(月) 1～4限目	2月16日(火) 1～4限目	指導例
角野 (人間関係) 8329	A	D	C	B	1限目 指導案作成の準備
福島 (言葉) 8409	B	C	D	A	2限目 指導案作成
上谷 (表現) プレイルーム	C	B	A	D	3限目 模擬保育
西谷 (健康) 8201	D	A	B	C	4限目 講評、グループディスカッション
					事後学習 まとめ、日誌記入(学生のみで)
					グループ構成
					Aグループ (角野+鮫島クラス)
					Bグループ (福島+帖佐クラス)
					Cグループ (上谷+深田クラス)
					Dグループ (古村+脇クラス)

模擬保育の保育者役は初日4人、翌日は別の4人と、全学生に一度は経験させる。

(2) オンライン実習

本学内実習は10日間のうち2日間をオンライン実習日と設定した。表2学内実習スケジュールの通り、オンライン1日目は伝承遊び、児童文化財、子どもを取り巻く文化についての3つを課題として提示した。伝承遊びは定義の考察、単なる遊びとの違いを理解した上でその後の模擬保育(4日間)での活動内容(上谷・福島

合同グループ)の手作りかるた、牛乳パックで作る缶ぽっくりの活動へとつなげた。児童文化財については主に絵本を取り扱い、それぞれが予め選んでいた絵本がどのような工夫がされているかの理解を深めた。子どもの取り巻く文化については子どもがおかれる様々な環境を見つめなおし、今後の指導案作成の際の視野を広げることを目的とした。2日目のオンライン実習ではサブカルチャー調べもの学習、保育園設置基準、実習における安全面の配慮～評価実習に向けて～をそれぞれ実施した。サブカルチャー調べもの学習は、アニメや絵本を題材として使用し、主に正義論についてのグループ討議を実施した。保育園設置基準については、保育所が実際にどのような法的根拠に基づいて運営されているのか、それら基準は何のために設けられているのかを考察した。最後に、実習における安全面の配慮～評価保育に向けて～については、翌日から実施される評価保育に関して、それぞれが活動内容だけではなく、実際に子ども達が活動することを想定した上でどのような危険があるかを考察した。

以上2日間のオンライン実習は、いずれも学内実習ならではの学びとなっただろうし、その後の学内実習の学びにつながる内容を設定したことで、実習生のより深い学びへと発展させることができたのではないかと思う。

(3) 模擬保育

a) 人間関係

保育5領域における人間関係に比重を置いた指導案作成と模擬保育、及び講評とディスカッションを通じた学生の主体的学びをサポートした。現行の保育所保育指針ではこの領域のねらいを「人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育るとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと」と定めている。さらに具体的な活動内容や意識すべき点として「ごっこ遊び、友だちや大人と関わること、自分の思いを伝えることの他に、自分でできることは自分ですること、決まりを守ること、異文化への関心を持つことなど」を挙げている。

これら指針を踏まえた上で、実習生が自発的に保育指導案を作成して模擬保育を実践した。具体的には、まず午前中にグループ内の各クラスで1日の主活動の指導案を2案ずつ作成する。そして午後は計4案の模擬保育を実践するのだが、このときは保育者、補助者以外の子ども役にグループ全員(2クラス合同)が参加して行った。所要時間は1案につき20分程度、導入→展開→終末のプロセスを意識した活動にするよう指導した。

4日間で4グループ×4案、計16案の模擬保育を実施したが、学生たちの指導上のねらいは「ゲームを通して、保育者や友達とのコミュニケーションを図る」というものが多かった。活動は、ごっこ遊び、お店屋さんごっこが最も多く、他には友達との身体的接触を伴う活動、ダンス遊び、新聞紙遊び等があった。

全員が保育実習Iで保育所実習を体験していたこともあって、どのグループも保育者だけでなく子ども役の実習生も役になりきることができて、実際の現場の雰囲気再現することができた。模擬保育を通して保育者の振る舞いや言葉遣い、子ども達の反応等に理由や意味があることを学んだという実習生も少なくなかった。

だがその一方で、活動本来のねらいや意義を忘れてしまうことが多く、保育者だけが楽しんでいたり、活動に集中しすぎて子どもひとり一人への配慮が疎かになったりなど、反省すべき点も多々あった。

模擬授業後の教員からの講評ではこれら注意点を指摘し、それぞれの事後学習の課題とするよう指導した。

b) 言葉と表現

5領域における言葉と表現は深いかかわりがあることから、2日間を通して領域を超えた活動を実践した。活動形態は学生間で子ども役と保育者役となり、子ども役の場合は子どもの気持ちになっての発言や行動をする。また、保育者役は指導案の考え方、子供への言葉かけや活動の展開方法等について模擬保育を行い、終了後に問題点の共有と改善策について意見交換を行うことで、保育技術の習得を図ることを目的とした。

1日目前半は、前節で触れたオンライン学習での学びを実践するため、各グループで手作りかるた、牛乳パックで作る缶ぽっくり製作を題材に、伝承遊びをテーマにした模擬保育を行う。後半は絵本から始まる活動として、保育の展開方法について学びを深めた。具体的にはまず、予め教員から提示していた『あおくんときいろ

ちゃん』(絵レオ・レオーニ、文・訳藤田圭雄、至光社、1967年)『おなかのすくさんぽ』(かたやまけん作、福音館書店、1992年)の2冊について、グループごとに読み聞かせを実践し、保育活動の導入としてのスキル向上を図った。次にそれぞれに感じた内容や、どういったテーマが含意されているか等の意見交換を実施した。その後、絵本から感じた内容やテーマを元に、グループごとで絵画表現に移行する活動に挑んだ。2日目は保育所の1日を想定し、登園から降園までをシュミレーションしたデイリープログラムを施し、グループごとに担当を決めて保育園の一日を模す形での模擬保育を行う。終了後は全体でフィードバックを行い、最終日に予定されている評価保育へとつなげた。

絵本は基本的なイメージとして、主活動の前に導入部分のツールとして使用されるケースが多い。しかし、今回のグループ活動の目的の一つとして学生に、絵本は「導入だけではない」という視野を新たに持ってもらう意図が含まれていた。一方、2日目は保育所の1日の流れをイメージすることで、学内実習という状況下でできる限りの保育現場の模擬体験を試みた。

c) 健康

方針として、全員が実習で取り組む子どもの年齢的実態に対応した保育案作成とその実践の総括をして、次の実践に生かす形式に近い形で学内実習に取り組むことにした。

I期の全学生対象の講義では、保育指導案の基本的な書き方の理解を図った。次に、幼児理解については、「幼児期運動指針」の子どもの発達に対応した遊び内容の理解を図り、鹿児島国際大学附属幼稚園の指導計画『鹿児島幼稚園の教育』における年齢別の「幼児の姿」と2年次前期の「基礎実習」教科書『発達がわかれば子どもが見える』(乳幼児保育研究会編著、ぎょうせい、2009年)を対象に幼児の発達の実態と援助の仕方を把握する段取りを取らせた。さらに、新聞紙で扱う運動領域は『新聞紙で遊ぼう!「雨の日だってへっちら!」』(熊丸みつ子、かもがわ出版、2004年)が鬼遊び系・縄跳び系・ボール運動系・その他の導入的遊びとして設定できる内容を含んでいることを資料配布して理解を図った。その上で、1グループ7名を3歳児(2名)、4歳児(2名)、5歳児(3名)で役割分担をさせて、その後同一年齢で教材系の重複が無いように割り当てを決めさせて、II期の模擬保育当日実習直前に保育案提出をさせて模擬保育に取り組んだ。

II期の模擬保育実施スタイルは、1限・2限・3限のそれぞれ90分を3歳児・4歳・5歳児の年齢ごとに模擬保育実施(20分×2名/3名)と総括(30分)を組み合わせて取り組んだ。各模擬保育終了後には、子ども役の学生に模擬保育の総括文を作成(約20分)し、実践者がそれを回収して4限目までに読み込み、それらを踏まえて実践者自身の総括を実施した。2グループ同時に実施したので、14人分の保育案を見ながら実践の総括を実施できた。模擬保育から総括まで学生自身が主体的に取り組むことができた。

(4) 評価保育

実習事前指導での指示事項は、①模擬保育で保育者役をやった活動でもそうでなくてもかまわない。②模擬保育で保育者役を実施した領域やテーマと異なる活動を選んでもよい。③全員が保育者役を実践する④保育者と補助教諭以外のクラスメンバーは全員で子ども役をする。⑤評価保育とあるがこの一回で最終的な実習評価が決まるのではない。以上5点である。模擬保育と異なりクラス単位(7名)での実施になるが、とくに問題もなく全員が評価保育を終えることができた。

評価授業を終えて提出された事後レポートは、いずれのクラスにおいても「もっとこのメンバーで保育を学びたい」「最初は不安だったけど、現場実習以上に勉強になることが多かった」「模擬保育や評価保育で他の人の保育が見られてとても参考になった」等、充実した実習ができたことに満足する意見が多かった。

実習評価に関しては、先の指示事項⑤で実習生に伝えた内容と同じく、評価保育のウエートは大きいもののそれ以外の通常の実習態度も考慮した総合的評価をしていただくよう担任教員に依頼した。また、今回は学内実習ではあるが、あくまでも通常の実習と同じ扱いのため、評価にも通常の実習と同じ評価票を用いた。評価の詳細は省略するが、学内実習ではあるものの全員が担任教員より高い評価を受けたことを記しておく。

3. 保育実習Ⅲ（施設）主担当／関山均

(1) 全体スケジュール

学内実習のスケジュールや内容については、実習生18人が2月の実習先として障害者施設（2人）、児童養護施設（10人）、児童発達支援センター（6人）を希望していたことや、ほとんどの実習生が保育実習Ⅰ（施設・保育所）の反省の中で「施設や障害への理解が不十分で児童や利用者への支援に課題が残った」と記していたことなどを考慮した。各実習生の希望する実習先各施設の特徴を基に実習初日に本実習の趣旨や目的を踏まえ

表4. 保育実習Ⅲ学内実習スケジュール

	火	水	木	金	土
実習生18名	2月9日（1日目）	2月10日（2日目）	2月11日（3日目）	2月12日（4日目）	2月13日（5日目）
主担当（8123）	関山	関山	終日オンライン実習 関山	関山	関山
9:00～9:10	前日の日誌と出勤簿の提出。*オンラインの日を除く				
9:10～12:20	・6月実習の反省 ・学内実習課題の設定と計画 ・評価実習計画作成	小学校におけるつまづきのある子ども・関係機関との連携（関山） 発達支援事業「すくすくはっぴー」見学の事前学習（今村様）	見学実習の課題設定と準備 レクリエーションの計画・準備	発達支援事業「すくすくはっぴー」の見学実習（グループ①） ※見学実習のまとめ、学内実習課題の調べ学習（見学実習以外のグループ）	発達支援事業「すくすくはっぴー」の見学実習（グループ③） ※見学実習の準備・まとめ、学内実習課題の調べ学習（見学実習以外のグループ）
12:20～13:00	昼休み（感染症リスク軽減のため、昼食はクラス教室でとること）			昼休み（感染症リスク軽減のため、昼食はクラス教室でとること）	
13:00～16:00	県社会福祉事業団について（柴山様） 卒業生の体験	療育における音楽の活用について（中村ま先生）	学内実習課題の調べ学習（施設・障害への理解・対応） 学内実習課題の調べ学習（施設・障害への理解・対応）	13:40～16:00 発達支援事業「すくすくはっぴー」の見学実習（グループ②） ※見学実習の準備・まとめ、学内実習課題の調べ学習（見学実習以外のグループ）	13:40～16:00 発達支援事業「すくすくはっぴー」の見学実習（グループ④） ※見学実習のまとめ、学内実習課題の調べ学習（見学実習以外のグループ）
事後学習	出勤簿を担任から受け取り、その後は随時解散。（オンライン日を除く）帰宅後は事後学習を行う。（その日のまとめと反省、日誌の記入、レポート）*日誌には学習内容を整理して記載すること				

	月	火	水	木	金
	2月15日（6日目）	2月16日（7日目）	2月17日（8日目）	2月18日（9日目）	2月19日（10日目）
主担当	関山	関山	終日オンライン実習 関山	関山	関山
9:00～9:10	前日の日誌と出勤簿の提出。*オンラインの日を除く				
9:10～12:20	見学実習のまとめ・発表・意見交換 レクリエーションの振り返り 調べ学習の中間報告・情報交換	児童養護施設の理解DVD視聴（手のひらの幸せ） 感想記入・意見交換	学内実習課題の調べ学習（施設・障害への理解・対応）のまとめ	評価実習	評価実習
12:20～13:00	昼休み（感染症リスク軽減のため、昼食は各クラス教室でとること）			昼休み（感染症リスク軽減のため、昼食は各クラス教室でとること）	
13:00～16:00	特別支援教育・特別支援学校の理解（古賀先生）	ケース学習の実践練習	評価実習の準備	評価実習 まとめと反省	評価実習 実習総括
事後学習	出勤簿を担任から受け取り、その後は随時解散。（オンライン日を除く）帰宅後は事後学習を行う。（その日のまとめと反省、日誌の記入、レポート）*日誌には学習内容を整理して記載すること				

た課題設定を行い、少しでも本実習を通して自己課題解決が図られるようにした。また自宅学習（1日3時間程度）として日々の実習目標や学習内容、反省・考察を自己課題に沿って実習記録簿に整理・記入し、翌朝に出勤票と健康チェックシートとともに提出をするように指導を行った。さらに実習生の健康・安全を考慮した新型コロナウイルス感染防止対策を行い、過密なスケジュールにならないよう週の半ばにオンライン実習（自宅学習）を取り入れるなど無理のない充実した実習計画を作成した。

その結果、雪のため公共交通機関の遅延による数名の遅刻はあったものの10日間の学内実習を一人の欠席者もなく無事に終了することができた。各実習生は、学内実習課題の設定をスムーズに行い、高い意識をもって自己課題解決を主体的に進め、実習記録簿に自己課題や日々の実習目標に沿った学習内容・反省・考察を各自工夫しながら整理し記入することができた。全員が継続して取り組み、調べ学習や講話、見学実習、学生同士による情報交換などを通して視野の広がりとともに記録内容も各々充実した内容となった。その結果各学生からは、自己課題が徐々に解決できていく喜びや相互に学び合う楽しさを味わいながら充実した実習ができたとの感想が多くあった。

(2) オンライン実習（学内実習課題の調べ学習等）

自己課題への理解を深めて評価実習の発表に向けての準備を行うために、大学や公共の図書館、自宅で書籍やインターネットなどを活用した調べ学習を行った。その他オンライン実習として、見学実習の課題設定やレクリエーションの準備なども行った。

実習生は、本学図書館から必要な書籍を借りたりネットを活用したり、関係教員に相談したり、実習生同士で書籍交換や情報交換したりなどして、自己課題を熱心に意欲的に追究していた。ほとんどの実習生が、調べ学習を通して自分自身の考えを見直したり新たな知識を得たりして学びを深めることができたことを実感していた。

(3) 見学実習・講話

a) 児童発達支援事業所の療育（見学実習・講話）

療育についての専門知識や保育技術の内容理解を深めるために、「児童発達支援事業所すくすくはっぴー」の見学実習や児童発達管理責任者の講話を行い、本学教員による「療育における音楽活用」についての講話を行った。実習生は見学実習で4～5人のグループを編成し、施設職員や通園した母子とともに2時間程度の療育に参加し、後半には事前に準備した5分程度のレクリエーションをさせてもらった。また事前の打合せや事後の反省会にも参加して当日の療育の目的や考え方などの指導をもらい、実習生の質問にも答えてもらった。その結果、児童発達管理責任者の事前講話で療育すべてに意図や意味があることを聞いていた実習生は、入室すると同時に室内の温かな雰囲気を感じ取ったり、子ども目線に立った様々な施設の工夫に気付いたりしていた。親が見守る中、保育士が子ども一人一人の特性やその日の様子に応じて視覚や言葉、音楽などを有効に活用し寄り添った支援を行う姿を見たり一緒に関わったりする中で、保育士の行動や環境設定一つ一つに込められた意図や意味を考えながら取り組んでいた。療育の成果は落ち着きをもって成長した子ども一人一人の姿に現れており、小児科医や看護師、様々な専門職（言語聴覚士、音楽療法士、発達相談員等）の日々の療育の積み重ねによることを学生は実感するとともに自分自身もそのような支援方法を身に付けたいと意欲を高めていた。

b) 社会福祉法人鹿児島県社会福祉事業団（講話）

児童福祉施設等への理解を深めるために、9施設・11事業所の入所・通所施設を運営する県福祉事業団について二人の事務局職員から児童福祉施設等の役割や事業目的、基本理念、求められる職員像、児童・利用者の実態や援助のあり方や給与・福利厚生、職員研修、採用試験などまで説明を受けた。また本学の卒業生で新採1年目の二人の保育士から保育園と児童養護施設での子どもとの関わりについて具体的な体験を語ってもらった。

実習生は、施設に関する自分たちの知識不足や専門的な立場からの施設理解の重要性、どの施設においても

利用者の実態に応じた支援がなされるなどの様々なケースや状況があることを事務局職員の専門的な講話から学び、やる気に満ちた保育士の体験談からも感じながら、児童福祉施設等への理解の深まりや広がりと同時に仕事への希望や意欲を実習記録簿に率直に記していた。

c) 小学校における子どもの実態と各関係機関との連携（講話）

小学校でつまずきのある子どもの実態や支援方法、関係機関との連携などについて理解を深めるために、小学校教員経験を有する担当教員が小学校における具体的な事例をもとに講話を行った。

実習生は、発達障害や情緒障害、母子分離不安などをもつ子どもの状況や支援方法の理解、子どもだけでなく保護者への働きかけや連携の大切さ、愛着形成の大切さ何よりも問題から逃げずにしっかりと向き合い学び続けることの大切さなどを感じ取り、理解を深めていた。

d) 特別支援教育・特別支援学校（講話）

特別支援教育・特別支援学校について理解を深めるために、特別支援学校の経験を有する本学教員が講話を行った。

実習生は、特別支援教育等について授業を受ける機会がないために初めて知ることが多く、インクルーシブ教育や合理的配慮など特別支援教育に関わる基本的な理解を深めながら障害に関する自分自身の考え方や生き方を振り返っていた。

e) 児童養護施設（DVD視聴・事例研修）

児童養護施設の子どもの理解や職員の対応について理解を深めるために、映画「手のひらの幸せ」を視聴して感想をまとめ、さらに施設でよく起こりうる二つの事例を読んで、考える視点をもとに各自で考え、その後グループや全体で協議を行った。

実習生は、映画を見て兄弟の強い絆や兄弟愛、揺れ動く心の動き、兄弟に関わる人々や社会の状況などから、「6月実習が思い出され、あの時あんな声かけをすればよかったと思うことが多くあった」、「子どもの意思を尊重し寄り添い向き合いたい」、「胸が締め付けられた」などの感想をもち、保育士としての職責感や教育愛などを感じ取っていた。事例研修では、『実習生へ試し行動をする子どもへの対応』と『施設入所直後に行動上の問題をもつ子どもへの対応』の二つの事例について協議を行った。「実習生が相互に対応を考え協議する中で、これまでの学内学習での成果をもとに専門的な意見交換がなされ、新たな考えや支援方法が勉強になり学びが深まった」との感想があった。

(4) 評価実習（全体発表）

学内実習の成果や今後の課題の明確化と実習生相互の学びをさらに深めるために、講話や見学実習、自己課題の調べ学習を通しての自己課題解決の成果や課題について、パワーポイント等を使用した30分以内の発表・質疑を評価実習として全体の場で行った。

実習生18人の発表課題は、①小学校における特別支援学級 ②愛着 ③子どもの背景支援法 ④児童養護施設での子どもの状況 ⑤事例をもとに理解したこと ⑥注意欠陥・多動性障害（ADHD）の子どもたちの支援 ⑦子どもたちにどのような暮らしやすい環境をつくっているか ⑧療育施設での支援 ⑨児童養護施設に入所している子どもが抱える問題と支援法 ⑩児童発達支援 ⑪児童養護施設 ⑫発達障害の種類 学習支援方法 ⑬障害の種類とその支援方法 ⑭保育所・幼稚園での多様な支援方法 ⑮虐待の子どもへの影響や児童養護施設での支援方法 ⑯特別支援学級の支援と現状 ⑰発達障害のつまずきと事例から考えたこと ⑱子ども理解であった。実習生たちは本実習を通して学んだことを実践に活かし学び続けることが大切であると感じていた。

4. おわりに

今回の学内実習の取り組みは、実習開始3週間前から健康状態や行動履歴を学生各自で健康チェックシートに記録し、アルバイトについては2週間前から禁止といったコロナ対策を行なった。加えて、オンラインによ

る実習も取り入れた結果、実習生74名全員が体調を崩すこともなく、無遅刻無欠席で実習期間を終了することができた。内容については、外部実習での体験や経験には及ばずとも、学生の前向きな取り組みによって学内実習ならではの効果も多く見られ、今後の実習指導にも生かされる結果となったのではないかと考える。

Contents of on-campus practice as Nursery Practice Program II , Program III in Covid-19 pandemic.

Nursery Practice Program Committee in Faculty of Welfare Society, Department of Child Studies,
The International University of Kagoshima

Masahiko Kakuno, Hitoshi Sekiyama, Noriaki Nishitani, Go Fukushima,
Yuko Uetani, Kou Komura

Abstract:

From 2020, suddenly Covid-19 pandemic set up all over the world. So we can't keep usual life. Due to this pandemic, Nursery Practice Program Committee decided to work out on-campus practice as Nursery Practice Program II・III, instead of off-campus. Of course there are many different cases between on-campus and off-campus, since in this pandemic, might as well we tried students to learn special to on-campus practice for original inspiration and discover about nursery.

Finally, this practice is end without any trouble. Not only students, but also we got much inspirations and discovers about nursery. So, we fulfilled transaction between students and teachers, got learning beyond expectation.